

社団法人私立大学情報教育協会
平成20年度第2回英語学教育FD/IT活用研究委員会議事概要

I. 日時：平成20年7月19日（土）午前11時～午後1時

II. 私立大学情報教育協会事務局会議室

III. 出席者： 山本涼一委員長、田中宏明副委員長
北出 亮委員、西納春雄委員、小野隆啓委員
井端事務局長、森下、恩田

III. 検討事項

1. 「英語学教育における学士力について」
2. 「今後の活動について」
3. 「その他」

資料： 1. 委員会次第
2. 委員会出席表
3. 委員会メーリングリスト変更のお知らせ
4. 英語 学士力私案（山本・西納・原田・北出・田中・山本）
5. 参考：教育振興基本計画（抜粋：平成20年7月1日）

議事録

1. 「英語学教育における学士力について」

「学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針」における「2. 汎用的技能 (1)コミュニケーション・スキル 日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。」における、「能力」に関して2行ぐらゐの定義を9月末までに作成する。

宿題として提出された「英語 学士力」に関する意見を基に、「学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針」における1. 知識・理解、2. 汎用的技能、4. 総合的な学習経験と創造的思考力の3つの範疇においてまとめていくことが指示された。

「英語 学士力」に関する各委員の意見、説明が行われた。

以上の各委員の提案に基づき意見交換したところ、以下の旨の議論が行われた。

議 論

英語学士力の定義として、大学4年間の学習成果として大学卒業時における英語力とするのか、社会から求められる英語力として本来大学教育において達成されるべき英語力とするのかの決定が必要である。社会への接続という意味では大学が考えている英語力と社会の求める英語力の間には段差があるように思われる。

大学初年次における大学間格差があることは明白であるが、基本的に入学時点では英語語彙数2700、TOEIC 350（英検準2級）が標準と考えられる。ここから考えると学士力の英語力としては 卒業時に英語語彙数は2700+ α 、TOEIC 500が基本と考えられる。

英語語彙数の正当性を受講すべきである。2700という数字が受動的語彙(receptive vocabulary)なのか、能動的語彙(productive vocabulary)を意味するのかを明確にすべきである。そして、両語彙数の間に存在する比率を考慮に入れ、可能で有意義な語彙数の決定を行うべきである。

TOEICを基準とした際に、TOEICの点数の正当性の吟味が必要である。TOEIC 500が社会から求められる英語力であるとする場合、TOEIC 500に社会がどのようなものを求めてTOEIC 500と提示しているのかを吟味すべきである。

TOEICで適当とされる点数を取った後の自主学習が継続、向上させる方策を提示するべきであ

る。

一般に、大学入学時に比べて大学卒業時に英語の力が落ちていると感じている学生が多く存在する。大学で専門科目の教育において英語が用いられないため、英語を使用する機会が皆無にちかくなり、英語力は減退の一步をたどるばかりである。英語、言語が専門の大学、学部は学生の英語力測定を何らかの形で行っているだろうが、英語、言語が専門でない大学、学部においては英語力の測定などが行われていない事が多い。英語を外国語科目とする一般の大学では、教員同士の連携ができていないため、例えば英語で法学の授業をするようなことはないので、英語を使う機会がなく、英語力が落ちていく。大学での英語の授業は非常勤教員に依存する部分が多く、**core curriculum**などを策定し施行しなければ大学としての英語教育を実質的に改善することはできない。ただ、教員の意識があれば英語、言語が専門でない大学、学部においても英語力の測定などができるはずである。

大学入学時にテストを課し、**TOEIC 350**以下、語彙数**2700**以下の学生にはリメディアル科目を履修させ、非常勤の教員には、このレベルを達成できる授業を要求するという目標視点でのカリキュラムを考案、実施すべきである。

学士力の学習評価・成果には具体的な指標が必要である。社会から求められる英語力を**TOEIC 500**とするのが適当であろうか。日本における英語力測定の試験としては英検・**TOEIC**・**TOEFL**が一般的である。基準として、英検は、級の差が大きい、級取得時の正味期限的なものがないなどの点から適切ではないであろう。**TOEIC IP**か**TOEFL ITP**が適当ではないか。

TOEIC 500でどのようなことが英語でできるのかを押さえるべき。**TOEIC**の**HP**に基本的な情報はあがっているが、不明瞭である。**Can-Do list**のようなものが必要ではないか。

到達度に段階制を導入する可能性。（例えば、半数以上の学生がある基準をクリアできるとするもの）**Standard, Advanced, Remedial**のような目標を明示し、何を修了すれば段階を移行できるかなどを明確にする。これらの段階制にして到達目標を設定しても**core curriculum**や**can-do list**などが必要になってくる。

英語 学士の知識ということで、日本語の能力や異文化の知識なども入れるべきか。英語でものを理解するという場合、背景知識が無くては理解が可能とは言えない。しかし、背景知識が必要であることは当然であるが、それは「英語 学士力」といった場合に、英語 学士に固有のものではなく、「学士」一般に必要なものである。そうなった場合、「英語 学士力」の中にどれほどの背景知識というものを入れるべきなのかについての議論が必要である。

英語の学士力として、学士全体の共通基盤は別にして、最低限必要な英語能力としてまとめたたい。

英語、学士力に必要な具体的でかつ厳密な到達度を設定するには「望ましい到達度」などの言葉を入れた方が汎用性が出る。ただし、最終的にはそのような言葉を入れても、議論する間では用いない方が議論がより具体的で効率よく進む。

「～する準備がある」、「～する態度がある」という表現を入れることが適当ではないか。

4つのスキル（読む、書く、聞く、話す）において、企業が求める**TOEIC 500**というのは、いろいろな分野で、いろいろな仕事にこれから就く段階で、それぞれの専門に入る前の最低限の英語力ということである。

「実践的な場で英語を活用する能力がある。」ぐらいの表現が適切である。

どのような専門分野に進んでも、その分野で最低必要な、**fundamental**な英語の素養を養うことが必要であり、そのための**minimum requirement**（要求したい最低条件）を達成することを「英語 学士力」に盛り込む。

2. 委員会としては内向けのものと外向けのもの両方を作成していく。

副委員長が上記の議論の内容をまとめて、具体案をまとめ、次回の委員会で提示する。